(三) 最初からほんもので学ぶ

すでに述べたように、学校の漢字教育は、根本的には教育の時期を失しています。方法的には無策といってもいい“ばらばら学習”をしております。そして、そのほかにもう一つ大きな誤りを犯しているために、なお効果が上がらないのです。それは、国語教育がもつ致命的な欠陥なのですが、この欠陥が明治以来のものだけに根が深く、人はみな誤りだと思いにくいようです。その誤りとは、学校・山・川というようなありふれた漢字でも、最初はこれをかな書きして、決して漢字では教えない、ということです。

なにごとについてもそうですが、最初に身についたものを途中で変えるには、大変な努力が必要となります。初めの習慣をつけるのに要した時間より何倍もの、年齢によっては何十倍もの時間をかけなければ、新しい習慣は身につかないのです。それはお国訛りのことを考えてみると、よくわかりましょう。

ですから、がっこう・やま・かわ……という表記で教えるくらい愚かな学習方法はないのです。幼児はいうまでもありませんが、一年生でも「がっこう」より「学校」の方が、「やま」「かわ」より「山」「川」の方がはるかに覚えやすいのにもかかわらず、学校では依然としてこの愚をくり返しているのです。

しかし、基本的には、じっさいに困難であったとしても、やはり最初から“ほんもの”である漢字で教えなければいけない、という態度を堅持することが必要なのです。

わたしは、昭和 28 年から 5 年間、最初から“ほんもの”で学ばせる

やり方と、最初はかなで学ばせる普通のやり方とを比較実験してみました。

後者のやり方だと、一般によく言われるように「テストすれば書ける漢字でも、作文やノートにはなかなか使えない」「木(汽)車が木(来)た、というような誤った使い方をすることが多い」などの欠陥が出ますが、前者の場合は、絶対と言ってよいほど、そのような欠陥は出ません。

「学校」という漢字を習ってからも、やはり「がっこう」と書くのは、初めに「がっこう」と書く習慣がついてしまっているからです。つい「がっこう」と書いてしまうのは当然の結果でしょう。

ところが、最初から「学校」と学んだ子どもたちは、たとえ書く能力が不十分でも、「がっこう」とは決して書きません。手本にする字を捜し出してそれを見ながら「学校」と書きます。ですから、書くことによって書く力をさらに伸ばしていきますが、先に「がっごう」と習った子どもたちは、漢字を使いませんから、一時的には練習で書けるようになった漢字でも忘れてしまいます。「木車が木た」というような漢字の使い方をする欠陥は、最初から「汽車が来た」と学んでおれば起こらないで済むものです。

初めに「きしゃがきた」「つみき」などと、かな書きで教えこみ、あとになって「つみ木」が出てきます。すると子どもにとっては、き＝木となるでしょう。そこで、「きしゃ」が「木しゃ」になるのは当然なのです。これでは学習する子どももかわいそうですし、教える先生もつらいわけです。